

里山との関わりからみた人と自然のふれあい行動に関する研究

○古平 瑞季 [東京農業大学] △栗田和弥 [東京農業大学]

都市部では、都市公園などの創出された空間は増加の傾向にあるものの、自然とのふれあいを目的とした空間や機会は必ずしも多くないと考えられる。また、農山村では減反政策や後継者不足等による耕作放棄地、管理のされていない山林が増加している。さらに、野遊びなどが減少し、子どもは屋内で過ごすことが多くなり、人と自然の関係が希薄になっていると考えられる。人と動植物といった、自然との関わりが一般的にみて都市部より深いと思われるものの、ふれあいの実際は調べられていないと考えられる場所として里山の環境、具体的には都市隣縁の多摩丘陵（東京都町田市の一部）および典型的な農村地域の阿武隈山地（福島県鮫川村の一部）を対象とした。地域に暮らしている住民、または来訪者に対して自然とのふれあいを感じる空間などについてアンケート調査や聞き取り調査を実施し、里山と呼ばれる自然環境の中で行われている人と自然のふれあいの現状について明らかにした。過去との比較調査はしていないものの、普段の生活ではどのようなものや空間にふれあいを感じるのかに関する調査により、これからの都市と里山での人と自然の関わりあい、希薄になった関係を再構築していくためにはどのような事をしていけばよいのかを導き出したい。本ポスターではその経過を報告する。

文化的な景観を巡るフットパスの提案およびマップの制作について
～石川県輪島市三井町を事例として～

○中平 工 松本開地 △下嶋 聖 △上岡洋晴 △栗田和弥 △麻生 恵 [東京農業大学]

キーワード：文化的景観 里山 保全・活用 フットパス

能登半島の中でも多様な形態で文化的な景観を有する石川県輪島市は、海や海岸近くに特有な景観のみならず、中山間地でも伝統的な建築様式や旧来と大きく変わらない農林業を維持しており、そのため固有の美しさを現在まで伝えている。その一例として輪島市三井町があり、本学・自然環境保全学研究室ならびに観光レクリエーション研究室は、夏季合宿などを通じて、研究・教育・実践の場として、地域住民との交流・自然や文化的な体験をし、研究室活動としての調査・提案を続けてきている。2010年度は、過去の活動とは異なり、研究室内での活動にとどまらず将来的な観光客誘致へのきっかけにもなり、かつ研究室員以外にも活用が可能となるべく「フットパス・マップ」の作成を行った。そこでポスターにおいて、地域住民から得られた情報や、研究室員が自ら発見した景観、そして歴史的に活用されてきた古道を繋ぐことで、歩いて楽しむ農村景観の事例を紹介する。